

皆さんは、「周璇」「黎莉莉」や「黎錦光」「劉雪庵」という中国人をご存知だろうか。四人とも1930年代の上海——あの租界時代の混沌とした上海でキラ星のごとく輝いた星たちである。四人の中では黎錦光が「夜来香」を作曲した人だということだけ知っていたが、その生いたちやどのような活躍をした人なのかは知らない。残りの三人は全く知らなかった。始めの二人は歌手であり女優であって、後の二人は作曲家である。

昨年末(2011年末)、友人が「この本を読んだことあるか?」と言って「何日君再来物語」という単行本を私の目の前に置いた。カラフルな表紙には、五人の女性の顔写真が印刷されていた。彼女たちは、「周璇」「黎莉莉」「山口淑子(李香蘭)」「渡辺はま子」「テレサ・テン(鄧麗君)」である。五人に共通しているのは、いずれも中国の名曲「何日君再来」を歌って一世を風靡したことである。顔立ちは皆違って特徴があるが、彼女たちは皆美しい。その本の題名と表紙を飾る顔を見て、若い頃のいくつかの思い出がよみがえり、懐かしさを覚え早速借りて一気に読み通した。著者は中藪英助という人であるが、この人も私は知らなかった。

今年に入って町田市の文学館に行ったとき、偶然にも「中藪英助展」のパンフレットが目に入った。見ると神奈川近代文学館で没後10年を記念する形で展覧会が3月上旬から開かれると出ている。さっそくパンフレット片手に出掛けた。中に入るとかなり広いスペースで展示してある。貼りつけてある彼の年譜を見ると1920年に福岡県の北九州市で生まれている。

青年期を中国・北京で過ごしている。1946年(昭和21年)、26歳の時、日本に引き揚げ東京での生活が始まった。多くの作品を書き、昭和44年には「北京飯店旧館にて」で読売文学賞を受賞したりしている。展示コーナーを順に廻っていると「何日君再来物語」のコーナーが作ってあった。

そこには何種類かのこの曲のカセットテープや長い間不明であった作曲家や作詞家を調査するため、友達に

出した手紙なども置かれていた。この本を書くに当たっての彼の熱意が感じられた。そして2002年に81歳で亡くなっている。第二次世界大戦をはさみながら多くの国々の作家と交流し、幅広い活動の足跡をみると、うらやましくなる程の充実した一生を送った人であった。

私がこの歌に出会ったのは、今からもう30年余り昔だったと思うが、上司に連れられて、とあるバーにおいてであった。その店のママさんらしい50歳台と思われる中国人女性が興に乗ったのか、「何日君再来」を歌い始めたのである。もちろん中国語は分からなかったが耳に心地よく響いた。

中国の歌は独特の抑揚のものばかりと思っていたので、こんなに美しい歌もあるのかと“目からうろこ”の思いで聞き入った。それからしばらく時は流れたが、以前在籍していた会社の同期入社20周年だかの記念旅行で台湾に行った時、台北でテレサ・テンのCDを購入してこの曲と再会したのである。

その時に私は中国の歌は日本語の歌詞で歌うと作詞者の意図と違ってくるのではと思った。今から思えば、できることなら中国語で歌えるようになりたいと思ったのが中国語を勉強する一つのきっかけになったと思う。また漢詩について、上の文字から順に読まねば、韻や平仄のよさが伝わってこないため、漢詩も中国語の発音で読むことができればと若い頃から思ったこともある。余談ながらわんりい主催の「漢詩の会」が毎月開催されているが、植田先生の名講義にとっても満足している。

さて「何日君再来物語」は、時代を超え、国を超えて歌い継がれている名曲を、

①一体誰が作詞し、誰が作曲したのか。

②いかなる状況下で作られたのか。

③さまざまな偏見で見られたのはなぜか。

を著者が8年間も追いつけていくドキュメントである。これから何人かの人物を紹介しつつ筆を進めていきたい。まず周璇(チョウ・シュエン)について述べてみたい。



璇という字は「美しい珠玉」と辞書に出ている。美貌に相応しいよい名前であるが、彼女は1918年に貧しい家庭に生まれ、口減らしのためか両親から見捨てられ、オムツにくるまったまま周家に引き取られて養女となった。名前は小紅(シャオホン)と名づけられた。12歳の頃、芸能プロダクションのような会社に入って歌や舞踊に励んだ。天賦の才があったらしく歌舞の上達はめざましかった。

彼女は愛国歌謡の「民族之光」が好きでよく歌ったが、その歌詞に「敵の奴らを戦場で周旋しようではないか」という文句があった。「周旋」を辞書で引くと、「敵と渡り合う」「応対する」と出ているが、彼女の名字が周ということもあり周旋と名付けられた。そしてさらに映画界に入って「旋」の字を発音も同じ「璇」に改めたとこの本に書かれている。

ところでこの本を貸してくれた友人が、以前に中国の歌手のカセットテープをいくつかくれたことを思い出し、抽出の奥をかきまわしてみると、何と中蘭英助展に展示してあったものと同じテープが出てきた。いただいた時はあまり気にとめることもなく、すっかり忘れていたのだ。さっそく聞いてみた。

このテープには「何日君再来」はなかったが、彼女の有名な歌として本にも紹介されている「天涯歌女」と「四季歌」が入っていた。スイッチを押すと美しい声の流れ出て来た。これが当時の庶民が口にした大流行した歌かとじっくり耳を傾けた。しかし、私には、これらの曲もいかにも中国らしい抑揚の歌としか聞こえて来ない。声はとても美しいが、曲は日本人には馴染めないのだろうと感じた。とはいえ、歴史的な歌を聞くことができ、タイムスリップした気分させてもらったのはとても嬉しいことで改めて友人に感謝した。

彼女の声は「金嗓子(ジンサンズ)」——つまり彼女のノドは金の笛だ、と最大級の賛辞が贈られている。日本でいえばさしずめ美空ひばりといえようか。声量は美空ひばりにかなわないが、高音部の澄みきった美しい声は人の心を揺さぶるものがある。友人でもあった山口淑子(李香蘭)は昔をしのびつつ、インタビューで「彼女はナンバーワンの人気スターでした。しかし大歌手とか大女優ぶったりせず、純情で優しい素直な人でした。何日君再来だけでなく、いろんな歌を歌っていました。コブシのきく、ちょっと民謡風の歌がお上手でした。」と回想している(李香蘭については「長春市」[わんりい 172号]を参照ください)。



周璇は、大スターだったが日中戦争から第二次世界大戦へと激動の時代の波に翻弄されつつ、1957年、39歳という若さで病没した。彼女たちの生きた1930年代の上海は魔都と呼ばれていた。三合会などの地下組織による賭博、麻薬、売春などが平然と行われたり、租界を形づくった各国や蒋介石直属の秘密工作員の横行などまさに魔都であった。そうした状況下で1930年代は、上海映画の黄金時代でもあった。

シナリオ作家、監督、作曲家、俳優など各分野で有能な人材を輩出し、多くの映画スターを生み出した。一方で1931年には、中国・東北地方で満州事変が勃発、1937年に日中戦争が始まり、中国民衆の「抗日」は日に日に強まっていくのである。「何日君再来」は当初は愛し合う男女の別離の悲しみと再会の希望を歌ったものと思われていたようだが、映画には1937年に制作された抗日映画「三星伴月」に初めて取り入れられた。従ってこの歌は抗日の歌となった。歌ったのは主演女優の周璇であった。

そして1939年に制作された映画「孤島天堂」では黎莉莉がやはり抗日歌として歌った。彼女は「反攻を期して上海から離れる愛国青年の背中に向けて、今宵別れてのちいつの日君また帰るといふ気持ちで心を込めて歌った」と述懐している。「君」とは重慶に逃れた蒋介石にまた戻ってくれとの思いが込められているともささやかれていたようだ。この名曲は1938～39年に大流行したが、これらの映画の力に与ったものと思われる。上海のダンスホールでは必ずこの曲が演奏されたという。

その後、第二次世界大戦も終わり、時は流れた。文化大革命(1966～1976年)が大きな影響を与えたのであろうが、1980年にはなんと亡国の歌と新聞に書かれたのだ。そして1982年には中国の文化省により「何

日君再来」は黄色歌曲、つまり好色的歌謡——と発表された。時代の変遷とはいえ、「抗日の歌」が「亡国の歌」「黄色歌曲」とまで言われたのだ。作曲家の無念の気持ちは察するに余りある。なお、黎錦光が作曲した「夜来香」も同様に黄色歌曲のレッテルを貼られた。この2曲が黄色歌曲ならば近年の日本の歌のほとんどは黄色歌曲ではなかろうか。

そろそろまとめに入りたい。中藺の執念ともいえる調査でついに全貌が明らかとなった。この曲は、冒頭に掲げた4人の1人である劉雪庵が1936年、上海国立音楽専科学校在学中に、卒業する第4期生の送別パーティを校内で開くことになった際、作曲科の卒業生であった彼が即興的にタンゴのダンス曲を創作したものである。これが「何日君再来」の原曲で、歌詞はまだつけられていないが出席者一同の大好評を得たようである。原曲のタンゴ曲は聞いたことがないので是非聞いてみたいものだ。

その後、この曲を聞きつけた、ある映画監督が本人には事後承諾の形で主題曲に取り入れた映画が前述の「三星伴月」なのである。そしてこの時、黄嘉謨という人が詞をつけたのである。この時作曲は「晏如」とし、作詞は「貝林」というペンネームで世に出されたため、この名曲を霧がかかった状態にさせたように思われる。劉雪庵は、歌詞が卑俗すぎる部分があるとして不満だったようだが、すでに映画が出来上がっていて音楽学校を出たばかりの彼に反対が出来なかったらしい。このあたりはついに面会できた劉雪庵の息子の劉学蘇からの話である。中藺は劉雪庵に会うことは適わなかった。

本稿の最後に劉雪庵の生涯をみてみたい。彼は四川省銅梁県(今は重慶市に編入)の生まれで幼少から音楽がとて好きだった。長じて上海に行き「上海国立音楽専科学校」を受験し合格した。若い時から国を愛する気持ちが強く、1932年の偽満州国建国に憤激してピアノ曲「中国組曲」を作曲した。また「長城謡」という詞に曲譜をつけたりした。

「長城謡」は聞いたことはないが、中国の音楽史に残る抗日歌の傑作という。その後求めに応じて映画界に進出。数々の映画音楽を作曲した。中華人民共和国成立後は華東師範大学(上海市)の音楽科主任、中国音楽学院教授など歴任した。比較的順調な人生を歩んできたように見えるが、新国家の成立から文化大革命への大きな時代のうねりの中で、後半生は思いもよらぬ人生となった。それはこの何日君再来という曲が、作詞は別の人間だっ

たにもかかわらず、漢奸歌曲——つまり日本へ協力者が作曲した曲といつの間にか見なされたからである。文化大革命でも渦中におかれ、二十数年間にわたる迫害を受ける中で両眼とも失明するに至った。そして世間から抹殺されるようにして1985年に79歳で死去した。

この本の初版は1988年であるが、劉雪庵が亡くなってまだ間もないころである。この時点ではまだ黄色歌曲のレッテルに対する名誉回復はなされていない時であろう。息子の学蘇によろやく面会でき、多くの事実を問い質したあと、中藺は「(お父さんとこの曲の)名誉のため、本にして人間と芸術を愛する人々に伝えたい」と了解を求めると、彼は「不怕!(恐れぬ)」と言ったそうだ。当時の置かれた状況が如実に伝わってくるのではないか。文化大革命は多くの有能な人間を死に追いやっているが、ここにも犠牲者がいたのである。

〔追記〕

この〈雑感〉は、ここで終える予定でいた。ところが〈追記〉をどうしても書きたくなった。それは5月18日に開かれた林敏(リン・ミン)さんの「揚琴リサイタル」に関してである。彼女は多くの方がご存知と思うが、南京の生まれで、北京国立中央音楽大学で揚琴と西洋打楽器を修了され、その後中国国内はもとより海外で数々の公演を行われ活躍されている方である。ミュゼ川崎シンフォニーホールで開かれたリサイタルでは、ピアノ、ギター、コントラバスの演奏者と一緒に四人で世界各国の有名な17曲を精力的に演奏された。テンポの速い曲、ゆったりした曲とも感情豊かに演奏されたが、「蘇州夜曲」と「夜来香」は素敵な喉も披露され、甘くせつない歌声で会場を魅了した。

そして17曲目のカルメン幻想曲で締めくくられたのであるが、会場のアンコールの拍手で再度、「何日君再来」を演奏し、歌われたのである。演奏の前に「皆さんとまたどこかでお会いできますようにとの気持ちを込めて歌います」といわれ、会場は林敏さんの言葉とこの名曲にしばし酔いしれたのである。

尚、このリサイタルのプログラムの表題は「但愿人長久」と書かれていた。これは宋の時代の有名な詩人、蘇軾の一句である。林敏さんが冒頭、「昨年(2011年)の東日本大震災では多くの方が被害に遭われました。私は心がとても痛みました。しかし災害を乗り越えて前向きにがんばって欲しい。人々の長寿を願ってこの表題をつけた」との主旨のお話しをされたが、彼女のやさしい心に深く感動したことを付記して本稿を終わりとしたい。